論文掲載にあたって

山地杏平（小倉記念病院　循環器内科）

課題名：

Relation of ST-Segment Elevation Myocardial Infarction to Daily Ambient Temperature and Air Pollutant Levels in a Japanese Nationwide Percutaneous Coronary Intervention Registry

心臓の血管が詰まる急性心筋梗塞は、冬に多く発症することは、よく知られている事実ですし、また、寒い風呂場に入るなどといった、寒さの刺激で、急性心筋梗塞や、脳梗塞などの血管が詰まる病気をきたしやすいとも言われています。

日本心血管インターベンション治療学会では、日本全国の 929 施設を対象に、およそ 46 万人の冠動脈治療データベースを作成しました。このうち、2011 年から 2012 年にみられた、56863 人の、ST 上昇型と呼ばれる重篤な急性心筋梗塞の患者さんを対象に、治療された日の気温や、降水量といった天候因子、そして、窒素酸化物や PM2.5 といった大気汚染物質との関連を調べました。

この結果、今まで言われているように、夏に比べ、寒い冬に急性心筋梗塞の発症は多く見られました。さらには、冬のうちでも、急に寒くなった 3 日後に、急性心筋梗塞が多く見られていることがわかりました。また、通年を通して、急な気温上昇が見られた日にも、急性心筋梗塞の患者さんが増えていました。

急に寒くなった日の少し後に、急性心筋梗塞の患者さんが多く見られるといことは、以前から病院の現場で噂されることはありましたが、科学的には証明されていませんでした。今回の研究結果をもとに、今後は充実した病院の体制を整え、急性心筋梗塞を発症されてしまった方に、迅速な治療を提供することとともに、一般の方々にも、啓蒙することができたらと考えております。

一般的には、PM2.5 といった環境因子は、動脈硬化疾患の発症に関連しているといわれることも多いですが、今回の研究では明らかな関連はみられませんでした。日本では、大気汚染物質の濃度は、他国に比べ低い値を示しており、このため明らかな関連が見られなかったのではないかと考えています。

論文引用先：

Am J Cardiol. 2016 Dec 18 in press.